

『論理哲学論考』五十周年から百周年へ

飯田 隆

2021 年

1

『論理哲学論考』（以下では『論考』と略させてもらう）の初版本を一回だけ手にしたことがある。これは実際には『自然哲学年報』という雑誌の最終巻なので、「初版本」と言うのは正しくない。知っているひとは知っているように、これは、当時中国にいたラッセルに頼まれて出版元を探したドロシー・リンチが苦心の末に見つけたものなので、ウィトゲンシュタインがその出版にタッチしたものではない。それどころか、かれは、出版をラッセルに任せておきながら、これは自分の了解を得ないで出た海賊版だとまで言っただろう。しかし、『論考』が出版物の形で世に出たのは、これが最初なので、今年二〇二一年が、『論考』百周年であるというのは、まちがいでない。

私が『論考』「初版本」を手にしたのは、ある本屋さんが、これを稀覯本として当時私が勤務していた大学が購入してくれないかと持ってきたおかげである。保存状態のよいもので、黄色っぽい表紙に、丈の高い木立のイラストがあった。『論考』と「イラスト」を結び付けて考えたことはなかったので、ひどく意外だったことを覚えている。結局大学で買ってもらうまでには至らなかったが、個人的には貴重な経験をした。その時の本屋さんにも感謝している。

とはいえ、『論考』百周年と聞いて最初に思ったのは、このことではない。まず思ったのは、私が『論考』で学部の卒論を書いていたときに『論考』五十周年だったことである。これにはちょっと何とも言えない感じになった。もちろん、五十年、つまり半世紀経ったということもあるが、同時に、この五十年のあいだに『論考』についての私の理解がどれだけ進んだかと考えてみると、あまりはかばかしい答えが得られないということも関係している。たしかに、この五十年のあいだに、いろいろな知識は増えた。とりわけ、『論考』のウィトゲンシュタインが大きな影響を受けたフレーゲとラッセルの理論についての知識は、ある程度豊富になったと言ってよいだろう。また、後で述べる「断固読み」という『論考』の読み方も知った。だが、肝心の、『論考』が何を言っているのか—それとも「示しているのか」の方が適切かもしれない—についての理解は、あまり変わっていないように思える。

2

それでも、私の人生の中で、これほど長い期間にわたって付き合いしてきた本というのは、『論考』の他にない気がする。しかも、その付き合い方は、ひとが想像するようなものだけとは限らない。

『論考』のように有名なテキストであれば、それについての研究書や研究論文は夥しい数にのぼる。また、『哲学探究』に至る草稿の量とくらべれば少ないが、『論考』が最終的な形をとるまでに、ウィトゲンシュタイン自身によって書かれた草稿や覚書の類も結構の量がある。よって、『論考』を読むときに、こうした二次文献や遺稿のあれこれを意識しないということはむずかしい。しかし、私は一度だけ、こうしたこととまったく関係なしに、純粋に『論考』のテキストだけを対象にしたことがある。

でも、これは「研究」ではまったくなく、むしろその正反対で、要するに私は『論考』のテキストを「遊び」に使ったのである。一九八〇年代の半ばというのは、パソコンが日本で本格的に普及し出したとともに、「人工知能」という言葉がはやった時代でもある。私もさっそくパソコンを一台手に入れて、プログラミングの真似事に夢中になった。当時はやっていた人工知能は、「ルール・ベース AI」と呼ばれるもので、ある分野の「知識」を規則（ルール）の体系として形式化してコンピュータで処理できるようにするものだった。

そうした人工知能プログラムの中で有名なものに、イライザ (ELIZA) というのがある。これは、人間と対話するように作られたプログラムで、こちらの言う—実際にはタイプする—ことに返事をするだけでなく、新たに話題を提供したりすることで、コンピュータと話しているような錯覚を起こさせるものである。ただ実際にやっていることは、こちらが用いる文を少し変えて繰り返したり、前もって用意されている文のパターンに、こちらが発した言葉を埋め込んだりするだけであって、それほど高度なことをしているわけではない。それにもかかわらず、このプログラムは、じつに強力な錯覚を起こさせることで有名だった。このプログラムの「被験者」となった人の多くが、コンピュータと「話す」ことの虜となり、中には、自分のきわめて個人的な事柄についてコンピュータに相談する人まで出たという。

イライザは、自然言語処理という AI の分野に属するプログラムである。同じ分野に属するプログラムには、コンピュータに詩や小説を書かせるプログラムというものもある。そこで私が思いついたのは、『論考』をコンピュータに書かせるというアイデアである。もちろん、『論考』そのものを書かせるわけではない。『論考』に似せた『論考』まがいのテキストを作らせようというのである。『論考』が、こうした企図に向いている理由は容易に推測できよう。第一に、『論考』は、互いに独立性の高い短い文章から成っている。第二に、こうした文章は、比較的小きな語彙から構成されている。第三に、そうした語彙の多くは、きわめて抽象性が高いために、それから作られた文章に何らかの意味を読み込むことが可能である。しかも、そうした意味は、いか

にも「深く」思われる意味であることが多い。

自動的に文章を作成するプログラムは、いくつも手本があったので、作るのとはそれほどむずかしくなかった。乱数を使って、語彙や文型を選ぶとともに、いくつの文が同じ命題番号を構成するかを決めるのがミソである。いちばん苦心したのは、『論考』のような命題番号を生成するアルゴリズムを考えることだった。たとえば、5番台は、いわば横にどれだけ広がるのか、「5.5」まで行くのか、それとも「5.4」で終わるのか、また、どれだけ深くまで行くのか、つまり、小数点以下何位まで行くのかを「でたらめに」決めてやらねばならなかったからである。

それどころか解決して完成したプログラムは、何か数を与えてやれば、『論考』まがいの番号付きの一連の文章を出力することができた。出力されるテキストに私は *Tractatus Logico-Electronicus* という表題を与えた。最初に入力する数を変えてやれば、いくらでも違うテキストを得ることができた。

プログラムはもとより、それが生み出したテキストのサンプルもまったく残っていないのが残念だが、このときほど『論考』に楽しませてもらったことはない。私の自慢混じりの苦勞話を聞かされた人でさえ、この電子版『論考』を面白がってくれたことを覚えている。深読みのできる文がけっこうあったからにちがいない。

3

こうした遊びは、『論考』だったからできたのであって、『哲学探究』（以下でこちらは『探究』と略する）で同じようなことをしようとする人は、おそらくいないだろう。これがなぜかを考えてみることは、まったくの無駄ではないと私は思う。

まず、もっとも表面的には、『探究』が、順番に番号が振られただけの「覚書」からできていて、こうした「覚書」の中には短いアフォリズム風のものもないわけではないが、だいたい『論考』を形作っている命題よりは長いということが挙げられる。ちゃんと調べたわけではないが、語彙的にも、『探究』の方が『論考』よりもずっと多様だと思われる。

話を具体的にするために、『論考』と『探究』から、いま適当に選び出した二つの文章を比べてみよう。

五・五五六二 要素命題の必然的存在が純粋に論理的な根拠から知られるのであれば、このことは、分析されていない形の命題を理解する誰にでも知られることでなければならない。

三七九 まずこれだとわかり、その後でそれがどう呼ばれるかを思い出す。—こう言うのが正しいのはどんな場合かを考えてみよ。

本当はもっとたくさん例を挙げて比較しなければならないのだが、ここに挙げた例からだけでも、両者の違いをみることができる。第一に、『論考』からの文章には、「要素命題」や「分析されていない」といった、何か専門的にひびく用語が現れるのに対して、『探究』の方には、そうした言葉はいっさい現れない。第二に、『論考』からの文章は、「なければならない」で終わる断言であるに対して、『探究』からの文章は、断言ではなく、「考えてみよ」といった誘いかけである。

簡単なプログラムで、それらしい文章を作るのに適しているのがどちらであるかは明らかだろう。また仮に苦勞して『探究』風の文章を生成するようなプログラムを作ったとしても、それによって出力される文章が目を引きようなものになる公算は低い。要するに、『論考』の文体の方が、一般に理解されている「哲学」の雰囲気醸し出しているのに対して、『探究』の文体から「哲学らしさ」を感じ取るのは誰にでもできるというわけではない。いまの例で言えば、『論考』五・五五六二が何を意味しているかを言えなくとも、これが哲学的に何か「深い」ことを言っていると、ひとは思うのに対して、『探究』三七九節については、逆に、そこで言われていることがわかって、なぜそれが哲学と関係するのかと思うだけだろう。

ここでつい、哲学のテキストとしては、『論考』の方が『探究』よりもずっとわかりやすいと言いたくなる。『論考』では、哲学的論証が論証として提示されているわけではないが、そこから大小さまざまな論証を取り出せそうにみえる。また、そうした論証から引き出される結論が、『論考』以前の哲学に関してどんな帰結をもたらすかを検討することも、それほど問題ないようにみえる。それに対して、『探究』はどうだろうか。たしかに、そこから興味深い論証を引き出す、クリプキのような哲学者もいるが、クリプキの解釈が『探究』の解釈として正しいと認める人が少数にとどまっていることからわかるように、前提からきちんとしたステップを踏んで結論に至るような論証が、『探究』から読み取れると考える哲学者はあまりいない。また、過去の哲学との関係ということについて言えば、『探究』が出版されて以来、そうした関係を付けようとした試みの多く—「家族的類似」による普遍者理論の批判、基準概念による懷疑論論駁などが、思い浮かぶ—が、現在ではほとんど忘れ去られていることが多くを語っている。

だが、『論考』と『探究』をこのような仕方に対比することは、『論考』の根本的に間違った読み方に基づいていると論じることができる。こう論じるのは、『論考』の「断固読み」(resolute reading)と呼ばれる解釈を支持する哲学者である。この解釈の出現こそ、過去五十年の『論考』解釈史の中で最大の事件であったと言えるだろう。

4

『論考』の断固読みの核心は、『論考』の最後から二つ目の命題六・五四を文字通りに取ることにある。梯子の比喻で有名なこの命題によれば、『論考』の著者を理解するには、それを構成する命題を通り抜け、その上に立ち、乗り越え、最終的にそれが無意味であると認識しなければならない。断固読みが「断固」であるのは、『論考』の正しい読者が最終的に到達するべき認識、すなわち、『論考』を構成する命題が無意味であることを断固として保持する点にある。この読みに対立する「優柔不断読み」(irresolute reading)をとる解釈者—もちろん、この命名は、断固読みの側からのものである—は、『論考』を構成する命題が無意味であるということを「口では」認めながらも、そうした命題が、内容をもち重要な洞察を表現する十分に意味をもつものとして扱う点で、優柔不断なのである。

六・五四によれば、『論考』を構成している命題は無意味である。無意味な命題は、そもそも真や偽となることができない。よって、『論考』を構成する命題のどれについても、それが正しいかどうかと問うことはできない。また、前提や結論を構成する命題の真偽を問題にできるのでなければ、論証の正しさということも問題にできない。つまり、断固読みのように六・五四を文字通り取れば、『論考』を、その主張や議論の正誤を問うことのできる、ふつうの哲学のテキストのように読むことは決してできない。

だが、他方で、後年のウィトゲンシュタインが『論考』を誤りとみなしていたこともよく知られている。それは、多くの伝記的事実が告げるだけでなく、『探究』の中で『論考』の著者が何度か名指しで批判されていることから確かめられる。だが、何よりもそのことをはっきり証拠立てるのは、『論考』の序文で哲学の問題を最終的に解決したと言っていたウィトゲンシュタインが再び哲学の問題に取り組んだという事実である。『論考』での「解決」が解決でなかった、つまり、誤っていたとウィトゲンシュタイン本人が考えていたのでなければ、この事実は説明がつかない。

こうして断固読みの支持者は二重の課題を引き受けることになる。第一に、『論考』の読者が、『論考』を構成する命題が無意味であると認識することによって「世界を正しく見る」ようになるのは、どのようにしてなのかとウィトゲンシュタインは考えていたかを説明しなければならない。第二に、後年のウィトゲンシュタインに従って、こうした手続きが何らかの誤りを含んでいるとするのであれば、それはどこにあるのか—手続きの前提にか、手続きそのものにか、手続きの目的にか、それとも、そのどれとも違う点にか—を明らかにしなければならない。

ここで当然聞かれるのは、断固読みに対する私の立場である。「お前は、断固読みを支持するのか、それとも、優柔不断読みに甘んじるのか」というわけである。こう聞かれれば誰でも「優柔不断読み」の方を選ぶ気にはなれないだろう。それゆえ、こうした問いの立て方はフェアではないように思われる

が、別の仕方があるわけでもなさそうである。

実際のところ、断固読みを支持しない理由を探すのはむずかしい。『論考』から六・五四を追い出すことができるだろうか。つまり、六・五四は、それを無視するなり、否定するなりした方が、『論考』という著作にとってプラスにはたらくと考える理由があるだろうか。たしかに、六・五四はそれに先立つ命題を無意味にするわけだから、『論考』全体の整合性を高めるようにはたらくかもしれない。しかし、『論考』という書物を著すことによって実現しようとしたウィトゲンシュタインの意図にとって六・五四は、決して否定したり無視したりできるものではない。それは、『論考』の序文から読み取れることである。この点で、これは、要素命題の独立性や、命題の像理論とちがう。『論考』のこうした構成要素を否定すること、とくに要素命題の独立性を否定することが、『論考』を構成する命題の多くに深刻な影響を与えることは、いわゆる中期のウィトゲンシュタインの草稿群からよく証拠立てられている。しかしながら、こうした問題は、言ってみればテクニカルな事柄にすぎない。六・五四で問題となっていることは決してテクニカルな事柄などではない。それは、『論考』という哲学作品の本質にかかわる事柄である。

また、断固読みを支持する積極的な理由もある。それは、『論考』をこのように読むことでもっとも明瞭に、『探究』を書いた哲学者が、『論考』を書いた哲学者と同一の哲学者であることがわかることである。断固読みが教えるのは、『論考』の中には、どのような哲学的テーゼも、哲学的理論もないということである。『探究』にそうしたテーゼや理論を探してはならないということは、いまでは常識に属するだろうが、『論考』についてもそうだとわかっている場合でさえ、ひとはついそこにテーゼや理論を見つけたとってしまう。断固読みは、これを強く戒める。

しかし、これは『論考』にも責任があると言いたくなる。いかにも哲学の専門用語とみえる言葉の頻出、「ねばならない」で終わる断言の羅列、こうした『論考』のスタイルは、ここにこそ「真理」が隠されていると人に思わせるからである（だが、それは同時に、哲学を風刺するための格好の材料ともなる—かつての私の「遊び」には、『論考』を風刺するなどという意図はまったくなかったが、いま考えてみれば、そのように受け取られても不思議でなかった）。『論考』の誤りを確信するようになったウィトゲンシュタインは、『論考』のスタイルもまた誤りだったと考えるようになったのではないだろうか。

いずれにせよ、『論考』の見かけのスタイルに惑わされずに、断固読みのもとで『論考』を読むということは、じつに困難な事業だろうということも想像がつく。それは、『論考』の各命題を、後になって投げ捨てられるべき梯子の一段として、つまり、「無意味」であると判明するはずのものではあるが、次の一段を登るためには不可欠の一段として読む—よって、そのためには、その先の段を構成する命題を常に意識しながら読む—ということである。私

はかつて『論考』を「巨大な小冊子」と呼んだ（『ウィトゲンシュタイン 言語の限界』一九九七年、講談社）が、『論考』は、私が想像したよりもさらに巨大だったことになる。

虚心になって考えてみてわかったのだが、半世紀に及ぶ長い付き合いであるにせよ、また、断固読みの正当性を認めることに吝かでないにせよ、『論考』の全体をこのような仕方ですべて実際に読もうとするほど、私は『論考』にコミットしてはいない。むしろ、私としては、そうした断固とした読者からの報告を参考にしながら、気に入っていたり、気になっていたりする『論考』のあれこれの命題を読み直してみたいと思っている。